



2度目の災害（〈特集1〉阪神・淡路大震災 第2部 体験談）

横山, 博朗

(Citation)

神戸大学医学部神緑会学術誌, 11:98-99

(Issue Date)

1995-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81007399>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81007399>



“2 度目の災害”

横山博朗 (29年卒)

阪神大震災直前の1月14日、土曜日に娘夫婦が生後20日の初孫を連れて拙宅に参り、久り振りに楽しい新年を過しました。

翌日帰りましたが、阪神カメラに現像を依頼して1月17日に出来上る孫の写真を楽しみにしていました。

その17日未明に、グラグラと来た時には、夢うつつに大したこともあるまいと、高を括っていましたが、ちょっと様子が違うなと思った途端、私はベッドから壁際まではじき飛ばされました。3階ですので振幅が激しく、じっとしているより仕方ありません。ふとジャンボ旅客機が墜落する時は、こんな感じだろうかと思いました。

家族の安否を確かめてから鉄筋コンクリート5階建のわが家を見廻ると、思ったより被害は軽微でしたが、内部は惨憺たる有様で、応接間のシャンデリヤは落下し、グランドピアノも移動しており、食堂は散乱した食器類などが、暴発した消火剤で白く覆われていました。1階の診療所はレントゲンの透視台が1mも南側に寄り、医療器具、薬品、書類などが氾濫して足の踏み場もありません。5階の電気室ではキュービクルが倒れて硫酸が床に流れ出し、ボイラー室のガス給湯ボイラーも倒壊して配管が飴のように曲り、屋上の高架水槽も倒れていました。

4階の東半分が屋上庭園になっていますが、池の底に溜った泥が芝生の上に跳ね上って、その上に数匹の金魚が死んでいました。しかし池の水漏れもなく、ほっとしました。国道2号線に面した玄関もガレージも電動シャッターが降りて、外に出ることが出来ず、電話も不通で、完全に閉じ込められてしまいました。

翌18日に“はて、どうしたものか”と思って窓から外を眺めていると、“緊急工作隊”と書かれた消防署の車が通りましたので、これに連絡しようと玄関の横の窓から飛び降りて、隣家との間の狭い隙間を擦り抜けて道路に出ることが出来ました。陸橋に人だかりがしているので、三宮方面を眺めると、私の家から約40mのところにある5階建のビルが国道に倒れ込んで道路を半分ふさいでおり、火災も発生して警察、消防、自衛隊が活動中でした。聞くところによると6人亡く

なられたそうです。公衆電話で119番に電話をすると、すぐに5名の隊員が来てガレージのシャッターをこじ開けてくれました。普段、休日や深夜に救急隊から要請があると、救急車に乗って往診していたので、顔馴染になった若い隊員達が、この時ほど頼もしく思ったことはありません。

早速、親類の安否を尋ねると、義弟が診療所から自宅に帰れずにおるとのことで、PM6:00車で出掛けました。至るところ交通規制で手間どりましたが、約1時間で診療所に着き、割れた窓ガラスを板でふさぎ、戸締りをして出発しました。国道2号線は不通で、大開通りに廻ると車の渋滞がひどくて、これでは朝までかかると思い、三宮へ戻って山麓バイパスを経てPM10:50垂水の義弟の家に着きました。



爾来、ライフラインの破壊により人並に苦労しましたが、周辺の避難所になっている市営住宅の集会所や、校医をしている小学校を廻診し、入院を要する人が2人おりましたので、入院させたりして、多くの人の協力により1月30日、やっと診療再開に漕ぎつけた次第です。

余談になりますが、私が災害に遭ったのは今回が2度目で、1回目は昭和9年9月21日の室戸台風の時、天王寺第五小学校(現五条小学校)の2年生でしたが、

校舎が倒壊して級友達と共にその下敷になりました。

幸い軽傷だったので、大阪日赤病院に収容された私を母が背負って大軌電車(現近鉄大阪線)の沿道で大勢の人々と一緒に歩いて帰った思い出があります。後年、中学生の時、完全武装で樫原神宮まで40kmの夜行軍をしたのもこの道で、三八式歩兵銃が肩に食い込んだ痛みと共に終生忘れ難い道になっております。

末筆乍ら今回の大震災で亡くなられた同窓の方々のご冥福を心よりお祈り申します。